「未来きらめきプロジェクト」実施報告書

～不登校児童・生徒に向けた体験活動プログラムの記録～

2026（令和8）年3月

未来きらめきプロジェクト

東京都教育委員会

はじめに

東京都教育委員会では、不登校の状況にある児童・生徒が参加しやすい体験活動プログラムを提供することを目的に、令和5年度より不登校児童・生徒の社会的自立に向けた体験活動プログラム「未来きらめきプロジェクト」を実施しました。「未来きらめきプロジェクト」では、自然体験や芸術活動、ものづくり、対話を中心とした活動など、幅広いプログラムをNPOや地域の団体と協力して提供しており、こうした活動は、児童・生徒たちが安心できる環境で自分の興味・関心に触れたり、新しい体験に挑戦したりする機会として位置づけられています。

「未来きらめきプロジェクト」では、活動内容そのものだけでなく、スタッフとの関わり方や、親子それぞれが心地よく過ごせる場づくりを大切にしてきました。児童・生徒が自分で選び、自分のペースで参加できること、また地域の大人や同世代との出会いを通して小さな一歩を踏み出すことが重視されています。

本報告書では、これまでの「未来きらめきプロジェクト」における取組の事例や気づきを整理し、団体の工夫や参加した児童・生徒、保護者の声も紹介しながら、不登校児童・生徒における体験活動の意義や可能性をお伝えします。今後、体験活動プログラムを実施する都内自治体や団体の皆様がより良い体験の場をつくる際の参考となり、さまざまな児童・生徒が安心して豊かな体験を積み重ね、自分らしい学びを広げていくための一助となれば幸いです。

令和8年3月

東京都教育委員会

目次

第1章　現状と課題 …… 1

第2章　体験活動の事例紹介 …… 3

- **ティンカリング**（NPO法人 アートフル・アクション） …… 4
- **もうそう読書会**（atelier Beyond LLC） …… 6
- **HEART Global ミュージック・アウトリーチプログラム**（NPO法人 じぶん未来クラブ） …… 8
- **ダイアログ・イン・ザ・ダーク**（一般社団法人ダイアローグ・ジャパン・ソサエティ） …… 10
- **遊び？ 工作する？ぼーっとする？**（松葉谷戸に冒険遊び場をつくる会） …… 12
- **みんなで作る！ 子ども村**（認定NPO法人 夢職人） …… 14

第3章　児童・生徒及び保護者からの声 …… 17

第4章　事業の成果と今後の方向性 …… 28

コラム：不登校の状況にある児童・生徒に体験活動を届けるために …… 16

巻末資料 …… 29

第1章 現状と課題

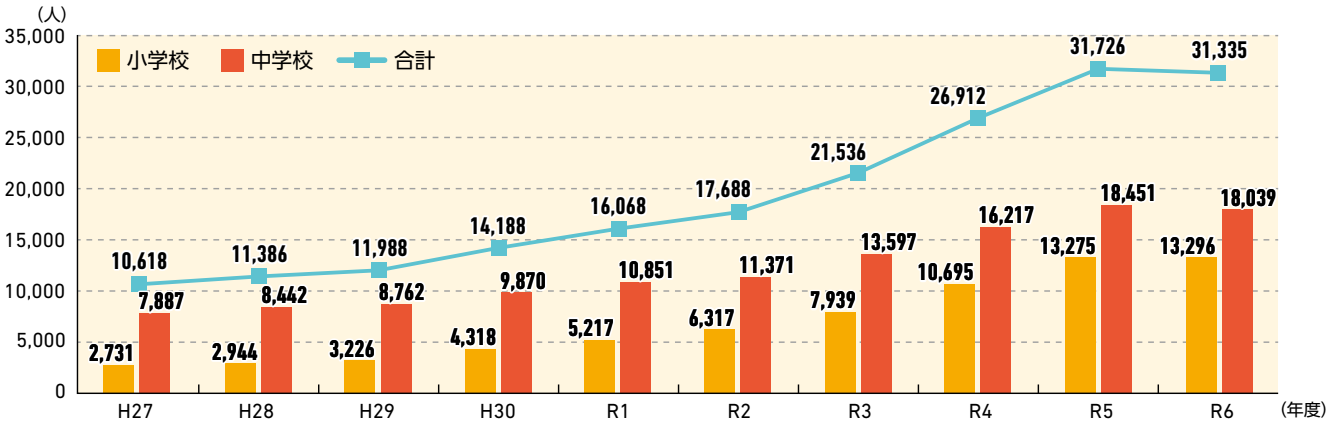
全国の不登校児童・生徒数は増加し、児童・生徒が自らの進路を主体的に描き、社会的自立へ向かう支援が必要とされています。体験活動は、失われがちな学びや他者とのつながりを取り戻す重要な機会となります。

1. 不登校を取り巻く現状

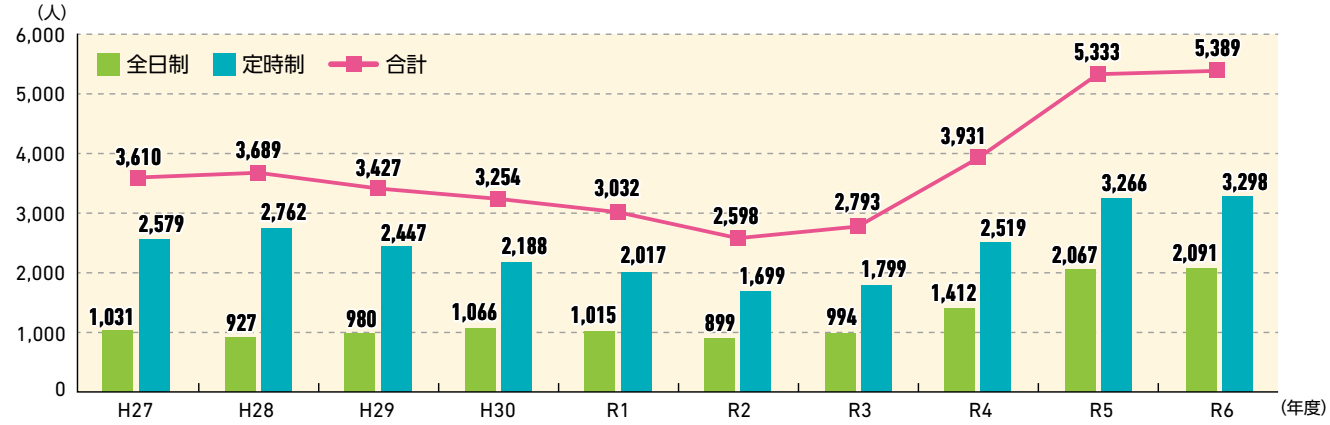
全国の小・中学校における不登校児童・生徒数は、令和6年度に35万3970人となり、過去最多を更新しました。東京都でも不登校児童・生徒数の合計は前年度から減少したものの、小学校・中学校合わせて約3万件を超える不登校が報告されました。また、都立高等学校においても、不登校生徒数が5千件を超える状況にあります。

不登校の背景には、学習や人間関係だけでなく、心身の不調や日常生活リズムの乱れ、家庭環境、学校環境への不適応など、多様で複合的な要因が指摘されています。また、相談につながらない児童・生徒も一定数存在し、早期把握と丁寧なアセスメントが求められています。

小学校・中学校における不登校児童・生徒数の推移（東京都）



都立高等学校における不登校生徒数の推移



「令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」について（東京都教育委員会）より

2. 社会的自立を目指した支援の重要性

不登校支援は、児童・生徒自身が自らの進路や生活を主体的に描き、社会の中で自分らしく生きていく力を育むことが重要とされています。特に、安心できる大人との関係づくり、多様な学びの選択肢の提示、学校と家庭、地域が連携した包括的な支援体制が欠かせません。また、経済的・心理的負担が児童・生徒の選択を狭めるケースも多く、地域の教育資源やNPO等との協働により、個々の児童・生徒が自身の興味・関心や強みを再発見できる機会を広げていくことが求められています。

3. 体験活動の意義と現状

「未来きらめきプロジェクト」において体験活動とは、自然や社会、人や物との関わりの中で、五感や身体を通して直接的に体験する活動のことであり、学びへの意欲や興味・関心を呼び起こし、自己肯定感を高める重要な機会として位置付けています。文部科学省による「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」（令和元年10月25日付元文科初第698号）においても、体験活動は児童・生徒の積極的な態度の醸成や自己肯定感の向上等が期待されるものとして示されています。不登校の児童・生徒にとっては、学校で得にくい体験を補い、安心できる環境で他者と関わるきっかけとなる点で特に重要となる一方で、体験活動の機会は家庭の経済状況、情報へのアクセス、保護者の付き添いの負担などによって大きく左右され、依然として参加のハードルが高いのが現状です。

4.「未来きらめきプロジェクト」について

「未来きらめきプロジェクト」は、不登校の児童・生徒たちが学校外で安心して多様な体験活動に参加できるよう、東京都が令和5年度から実施している取組です。自然体験やアートなど幅広いプログラムを無償で提供し、参加者にアンケートやインタビューへの協力をいただくことで、より参加しやすいプログラムの提供に努めてきました。また、NPO等と連携することで、児童・生徒一人ひとりの興味・関心に応じた活動の選択ができる柔軟性を確保し、初参加の児童・生徒でも安心できる体制を目指してきました。活動を通して他者とのつながりや多様な体験を積み重ねることは、自己肯定感を育み、社会的自立へ踏み出す基盤となります。本プロジェクトは、不登校の児童・生徒たちに新たな学びと体験の機会を開く重要な施策です。

第2章 体験活動の事例紹介

本章では、「未来きらめきプロジェクト」を通じて実施したプログラムの具体的な事例を、各団体へのヒアリングを元に紹介します。「未来きらめきプロジェクト」における実施プログラムは、その性質から以下のように分類しました。

実施プログラム

自己選択重視

安心感・好奇心の再起動

2時間程度の短時間で、興味・関心に合わせて体験内容を自由に選べる構成。保護者同伴も可能で、「評価されない実験・創作・遊び」を安心して楽しめる。開始・退出の自由度が高く、一人ひとりのペースを尊重して参加できる。

実施プログラム例

- **「ティンカリング ～身近なもの、こわしたり、つくったり～」**
  （NPO法人アートフル・アクション）
- **「 遊び？工作する？ぼーっとする？」**
  （松葉谷戸に冒険遊び場を作る会）

感覚共有・対話重視

人とのつながりの再発見

非日常環境で共に体験し、評価でなく体験共有を重視。短時間・ガイド付きの対話を通じ、理解・共感・承認を得られる安心の場で他者との関わりを再発見する。

実施プログラム例

- **「もうそう読書会」**
  （atelier Beyond LLC）
- **「 ダイアログ・イン・ザ・ダーク」**
  （一般社団法人Dialogue Japan Society）

協働・共創重視

単日 社会的役割の再構築

屋内外での協働を通じ、半日程度の活動で役割分担と達成体験を得られるプログラム。活動後の達成感と適度な疲労が生活リズムの再構築を促す。

実施プログラム例

- **「高尾わくわくハイキング」**
  「食材ゲットだぜ！ バーベキュー大作戦」
  （NPO法人夢職人）
- **「HEART Global**
  ミュージック・アウトリーチプログラム」
  （NPO法人　じぶん未来クラブ）

宿泊 挑戦・自己肯定感の拡大

宿泊を伴う連続日程で、共同生活・役割遂行の要素が強く、高負荷の設計。 家庭から離れて長期間の体験にチャレンジすることで、協働性・自立性を高め、体験を通して自己肯定感を育む。

実施プログラム例

- **「夏休み子どもサマーキャンプ（2泊3日）」**
  「みんなで作る！子ども村（2泊3日）」
  （NPO法人夢職人）

アイコンのご説明

参加方法や実施場所の分類を示しています。

個別

集団

屋外

屋内

自己選択重視

ティンカリング

（NPO法人 アートフル・アクション）

プログラムについて

ティンカリング

ティンカリングは、身近な素材をつくったりこわしたりしながら、多様なコーナーを自由に行き来できる創作体験プログラムです。参加した子供たちが、保護者や顔なじみの大人と一緒に、自分のペースで小さな挑戦と出会いを重ねられる安心な居場所です。

実施団体　NPO法人 アートフル・アクション
対　　象　小学3年生～高校生とその保護者
人数規模　20名程度
所要時間　2.5時間

Message

多くの方のご参加によりスタッフみんなで場を育ててきました。初めての場所へ飛び込むのは勇気がいることだと思いますが、少しでも安心して「何か」や「誰か」にばったり出会う体験になるようスタッフそれぞれが思考を積み重ねているのがティンカリング、まさに自分たちも「つくったりこわしたり」しながらより良い場づくりを目指しています。

NPO法人アートフルアクションは、小金井市を拠点に、芸術文化を通じた地域づくりを推進する団体です。長年にわたり、アートを媒介にした市民参加型の活動を展開し、特に不登校児童・生徒への支援として、安心できる場で創造的な体験を提供することを目的に、子供の好奇心を育む「ティンカリング」を実施しています。

1. “教える・教えられる”を超えて――関係性が生まれる場づくり

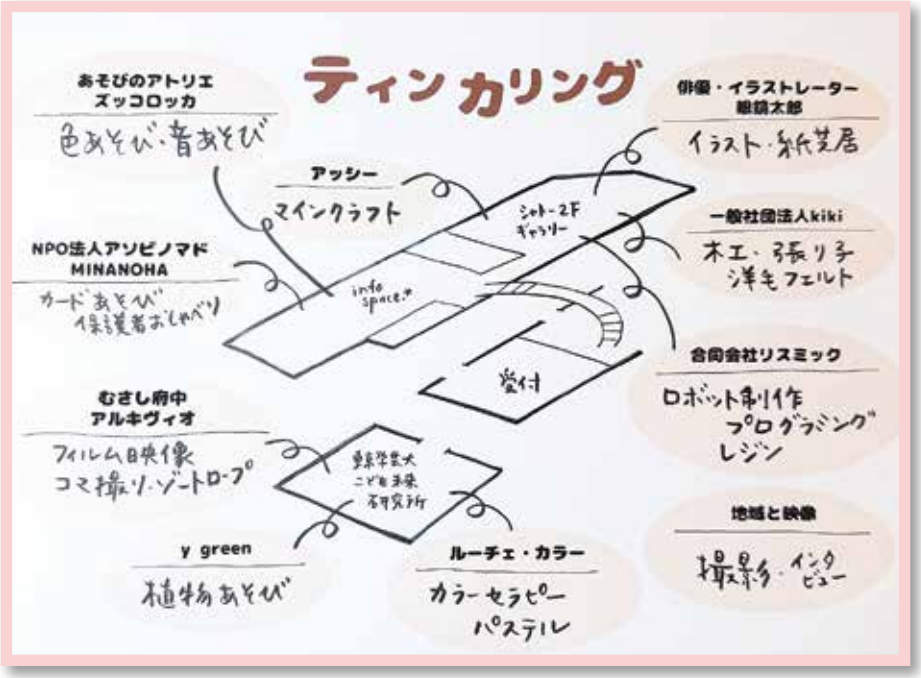
ティンカリングの現場では、まず“大人が教える／子供が教わる”という一方向の構図に依らない関係性づくりが大切にされています。この姿勢は、アートフルアクションがこれまでアーツカウンシル東京に関連する事業などで積み重ねてきた“ケア”を軸にした活動の延長にあります。スタッフは、子供がその瞬間に見せる興味や動きを丁寧に受け止めながら、安心して滞在できる環境を整えています。

さらに、不登校の経験をもつスタッフが保護者に寄り添いながら声をかける姿や、子供と同じ目線で一緒に手を動かす雰囲気が、参加者にとっての“安心の土台”となり、その結果、家庭では得がたい関係性や対話が自然に生まれていきます。

2. つながりがつながりを呼ぶ――市民活動から広がるネットワーク

このように関係性を軸にした場づくりが行われている一方で、ティンカリングの運営体制そのものも、人とのつながりを基盤に広がっています。スタッフの多くは、市民活動や地域活動を通じて自然につながり、出会った仲間とのネットワークが現在の運営の力を形づくっています。

また、プログラムの設計にはこれまでの「マルシェ」運営の知見が活かされています。複数のブースが並ぶことで偶発的な出会いや会話が生まれ、子供たちや保護者は思いがけない興味に触れることができます。この“偶然のきっかけ”を生む構造が、ティンカリングを豊かな場にしている大きな特徴です。



3. 親子が“別々にいられる”安心――心がほぐれるとき

こうして多様な人や活動が緩やかにつながる場であるからこそ、ティンカリングは“親子それぞれが安心して過ごせる場”として機能しています。家の中で常に親子が一緒に過ごし、緊張や不安を抱えている家庭も少なくありませんが、ここでは「一緒に来て、別々に過ごす」ことが自然にできる環境が整っています。子供は興味のあるブースで自分のペースで過ごし、保護者は同じ空間の別の場所でリラックスした時間を楽しむことができます。

さらに、複数回続けて参加する中で、子供自身が見学→手伝い→活動参加と段階を踏んで関わり方を変えていく姿も見られます。スタッフが心理的安全に配慮し、「何を・どこで・誰と・どう進むのか」を見える化したり、静かな席などの逃げ場を用意したりといった工夫をしていることが、子供が自分のペースで挑戦しやすい環境づくりにつながっています。保護者からも「子供の表情が明るく変わった」「安心して任せられた」という声が寄せられています。

4. “できることを持ち寄る”文化――チーム全員がつくる実験の場

こうした子供の変化や親子それぞれの安心を支えているのが、スタッフ全員による“持ち寄り”の文化です。ティンカリングでは、あらかじめ全体を細かく設計するのではなく、スタッフが自分の専門性や興味をもとにアイデアを出し合い、回ごとに内容を更新しながら場を育てています。スタッフ自身が心地よくいられることが子供の安心へとつながると考え、主体的に動ける環境づくりを大切にしています。

一方で、継続していくためには課題もあります。材料を保管する場所の不足や会場確保の難しさ、スタッフ調整や資金面の課題など、運営には多くのハードルが存在します。それでも、「また来たい」と感じられる場づくりのために、スタッフは工夫を重ねながら、この“持ち寄りの場”をさらに良くしていこうと努めています。

感覚共有・対話重視

もうそう読書会

（atelier Beyond LLC）

プログラムについて

もうそう読書会

本を読む前に内容を想像し、楽しみ方をたくさん探していくという、一風変わった体験を通して、想像力をふくらませ、自由な発想をすることで「正解」の枠を飛び越えていきます。おもいつきをどんどん語ります。「もうそうは創造のはじまり」。想像がひろがり、世界の見え方も変わっていくのを感じる場です。

実施団体　atelier Beyond LLC
対　　象　小学2年生～中学3年生とその保護者
人数規模　4～8名程度
所要時間　100分

Message

「本を読まない」読書会で使用した本をプレゼントしましたが、「その日のうちに一気読みした」という子がけっこういたのには驚きでした。そして題材となっていたラッコについて調べたくなり、舞台となったモントレーの水族館のライブカメラを観察したという親子も！イマジネーションがかき立てられたことで、本への興味がふくらむきっかけが生まれたことはなによりうれしいことでした。

既存の枠にとらわれない学びを大切にして活動する団体です。不登校かどうかにかかわらず、一人ひとりが自分のペースで世界を観察し、気づきを言葉や動きとして表現し、他者と共有するプロセスを重視しています。今回の「未来きらめきプロジェクト」では、その理念を生かした『もうそう読書会』を実施しました。

1. 学校では出会えない学び――“世界の見え方を問い直す”体験

アトリエビヨンドの取組は、「正解を求める学習」から離れ、子供が作品や出来事をどのように見たのか、その“視点”自体に価値を置く点が特徴です。『もうそう読書会』では、本を手がかりに「もしこうだったら？」「こんな見え方もあるかもしれない」と想像を広げ、言葉や絵で自由に表現します。読書・創作・対話が融合したワークショップであり、読み取った内容の正確さよりも、自分が感じた世界をどう形にするかを探る体験が促されます。こうした活動は、子供が自分の視点を再確認し、異なる見方に触れることで思考の幅を広げる機会となっています。

2. 子供の“好奇心のタネ”を育てる――探求が自分の速度で始まる

実施するプログラムでは、子供の『気になる』という小さな興味をそのまま起点として扱うことを重視しています。家庭や学校では拾いきれない場合もある小さな感性やつぶやきを、表現の種として丁寧に扱います。『もうそう読書会』でも、自由に描く・書く・想像することが認められており、何をどれだけ描くか、どんな表現にするかも本人の選択に委ねられています。このような環境が、子供が“やってみてもいいかもしれない”と感じる自然な探求につながり、結果として学びや創造のきっかけが自発的に立ち上がる場になっています。

3. 大人の価値観をほぐす――“枠にはめない関わり方”への転換

アトリエビヨンドの活動は、子供を支える大人側の姿勢にも大きな意味を持っています。子供を『できる／できない』で判断するのではなく、その子が見ている世界に寄り添いながら関わることが基本方針です。『もうそう読書会』でも、大人が作品理解や表現を誘導することはなく、子供が描いた世界をそのまま受け取り、興味深い点を共に味わう対話が中心となります。この関わり方によって、大人の側にも“子供の世界を一緒に見ようとする姿勢”が育まれ、子供に過度な期待や制限を課さない柔らかな関係性が構築されていきます。

協働・共創重視

HEART Global

ミュージック・アウトリーチプログラム

（NPO法人 じぶん未来クラブ）

プログラムについて

HEART Global

HEART Global の若者キャストと一緒に歌やダンス、演技を楽しみながら、短時間でショーを創り上げるプログラムです。新しい挑戦を通じて自信と勇気を育み、自己表現の楽しさを実感していただけます。

実施団体 NPO法人 じぶん未来クラブ
対　　象 小・中学生
人数規模 20名程度
所要時間 3時間程度

Message

「Yes, and（＝まずはやってみよう）」というフィロソフィーを大切にしています。未経験のことでも、まずは受け入れ挑戦してみる、その一歩が「楽しい」という実感に繋がり、「自分には色々なことができる」という自己発見を促します。この前向きな姿勢こそが、子供たちの新たな才能をきらめかせる原動力となります。

NPO法人じぶん未来クラブは、子供たちが「自分の気持ち」をそのまま表現できる体験の場づくりを大切にしています。「未来きらめきプロジェクト」で実施した『HEART Global ミュージック・アウトリーチプログラム』は、日本人と海外から来日する若者（キャスト）が子供たちと一緒に歌い、踊り、身体を使って表現する活動です。言葉や文化の違いを超え、音楽と身体表現を通して気持ちを伝え合う体験は、子供たちにとって非日常でありながらも安心できる学びの時間となりました。

1. 子供の自己表現をひらくプログラム――“やりたい”を尊重する文化から生まれる学び

このプログラムでは、子供たちの歌やダンスの経験を問わず参加でき、初めて挑戦する子でも楽しめる構成となっています。活動では、歌う・踊る・動きをまねる・自由にアレンジするなど、多様な表現に触れる機会が用意されており、正解を求められることはありません。参加を通して、子供たちは新しい表現に出会い、自分の内側にあるエネルギーや感情を、安全な環境の中で外に出す経験を積むことができます。こうした体験は、「やってみたい」という主体的な気持ちを育てるきっかけとなっています。

2. 気持ちを受けとめる場――“認められる経験”が次の一歩を生む

子供にとって、「評価される場」ではなく、「認めてもらえる場」であることはとても重要です。じぶん未来クラブでは、子供が「気持ちを聞いてもらえる」「どうしたいのかを受け止めてもらえる」場であることが、自己表現の後押しになり、自信の獲得につながると考えられています。活動の中で子供たちは、歌ったり踊ったりする中でスタッフや仲間から肯定的な反応をもらい、その経験が良い反応を生み、次のアクションへ踏み出す力を育みます。こうした安心感は、活動方針として掲げられている「安心・安全」「ダメは言わない」「やりたいようにさせる」という姿勢の上に成り立っています。スタッフ同士が日頃から互いを認め合う文化を持ち、イベントごとの振り返りを通して改善を続けている点も、場の質を支える重要な要素となっています。運営を支える大学生スタッフには敢えてマニュアルを用意せず、代々受け継がれる自然なサポート文化が息づいています。子供の特性に合わせて関わる姿勢が丁寧に調整され、子供の“やりたい気持ち”を起点に活動が展開される環境が整えられています。

3. 小さな変化を見逃さない――表情・行動にあらわれる“ほぐれ”の瞬間

プログラムの中では、子供たちに印象深い小さな変化が見られます。例えば、活動の最初は緊張して表情が固かった子が、最後には自然に「ありがとうございました」と言えたこと、自分の素顔を見せることに抵抗のあった子が、踊りの時間にはマスクを外して参加できたことなど、短時間の体験の中でも確かな変化が生まれました。これらの変化は、「自己表現してみる」→「良い反応が返ってくる」→「自信になる」という循環を丁寧につくっているからこそ起こることとして設計されています。表現教育を軸にしたプログラム設計に加え、キャストたちの理解しようとする姿勢や柔軟な働きかけが、子供たちの心身をゆるめる土台となり、子供たちが「自分でもできる」「やってみてもいい」と思える瞬間を積み重ねることが、次の挑戦につながるエネルギーになっています。

感覚共有・対話重視

ダイアログ・イン・ザ・ダーク（一般社団法人ダイアローグ・ジャパン・ソサエティ）

プログラムについて

ダイアログ・イン・ザ・ダーク

完全に光を遮断した空間で、視覚障害のあるアテンド（案内人）のサポートを受けながら活動するプログラムです。参加者は暗闇の中で聴覚・触覚・嗅覚といった多様な感覚を使い、新しいコミュニケーションや協働の形を体験します。

実施団体　一般社団法人ダイアローグ・ジャパン・ソサエティ
対　　象　小学1年生から小学6年生とその保護者
人数規模　16名程度
所要時間　2時間程度

Message

今年度、子供に加え保護者も対象とし、暗闇ではそれぞれがチームを組み、同じ体験をしました。体験後、異学年の子と手を繋いで戻る姿や、「友だちができた」と嬉しそうに語る子供の姿も見られました。出会いと気づきに満ちた時間は、親子の対話や喜びへとつながり、特別な体験の場として保護者からも好評を得ています。

1. 暗闇がつくり出す“わかり合う場”――多様性を体感する学び

ダイアログ・イン・ザ・ダークは、光が一筋も入らない暗闇の中を、参加者同士が声をかけ合い、協力しながら進む体験プログラムです。暗闇では、年齢や立場、特性にかかわらず全員が同じ条件に置かれるため、互いへの関わり方や言葉の使い方が自然と変化し、“同じ世界を手探りで進む仲間”としての感覚が生まれます。案内役を務めるのは視覚障害のあるアテンドであり、彼らのリードに身を委ねることで、自分とは異なる感じ方や世界の捉え方があることに気づき、自分の当たり前を見つめ直すきっかけとなります。暗闇という非日常は、自分と他者の違いを受け入れる柔らかな気づきを促し、多様性理解を深める学びの場を生み出します。

2. 子供の変化に寄り添う――暗闇で芽生える“ことば”と“自信”

暗闇での体験は、子供たちの内側にある感覚や言葉を自然に引き出します。視覚に頼れない環境では、自分が感じたことを誰かに伝えようとする意欲が芽生え、「ここに〇〇があるよ」「(自分は) ここにいるよ。大丈夫」といった率直な表現が生まれます。また、視覚障害のあるアテンドが丁寧に声をかけて支えてくれることで、「(今度は) 自分も役に立ちたい」と語る子が現れるなど、他者との関係を主体的に築こうとする姿も見られます。普段はなかなか声が出ない子が、自分のペースで発話できた場面もあり、暗闇が子供の緊張を和らげ、挑戦する意欲を自然に引き出す効果がうかがえます。この体験は、子供たちの自信の芽を育てる貴重な機会となっています。

3. 親子それぞれの学び――“別々に体験する”構造がもたらす気づき

プログラムでは、あえて親子を別々のチームに分けて同じ体験を行います。子供は親の視線や期待から離れ、自分の感じ方や挑戦のペースを保ちながら子供同士で暗闇の世界に向き合うことができます。一方、保護者は一参加者として暗闇に身を置き、日常とは異なる環境で自身の感覚や気づきを深めます。体験後、親子で言葉を持ち寄り、自分が感じたこと、できたこと、困ったことなどをゆっくり対話する機会が生まれます。親子が“同じ体験を別々に過ごす”という構造は、自分と子供はそれぞれ違う存在であるという当たり前の感覚を再確認させ、家庭での対話や関係づくりにも新しい視点をもたらします。

4. 安心を支える支援――“言えたね”を尊重する文化

暗闇の体験に怖さや不安を感じ、途中で退出を希望する子供がいても、スタッフはそれを否定せず、「言えたことが大事」と肯定的に受け止めます。この姿勢が子供たちの安心感を支えています。また、入室前に不安を抱えやすい子へ個別に声をかけたり、必要に応じて補助スタッフがそばについたりするなど、状況に応じた柔軟な支援が行われます。さらに、視覚障害のあるアテンドが自身の経験や感じ方を語ることで、子供たちは他者を理解するヒントを得たり、自分の不安を言葉にしやすくなったりします。こうした“その子の声を尊重する文化”が、暗闇という非日常的な環境を、安心して挑める学びの場へと変えています。

自己選択重視

遊び？工作する？ぼーっとする？（松葉谷戸に冒険遊び場をつくる会）

プログラムについて

遊び？工作する？ぼーっとする？

冒険遊び場という「子供たちが自由に過ごせる自然いっぱいの居場所」で、「自分で遊びを考える」プログラムです。秘密基地作り、ロープ遊具に木工作、ハンモックに揺られてゆっくりするなど、思い思いのやり方で過ごします。

実施団体　松葉谷戸に冒険遊び場をつくる会
対　　象　小学1年生～高校3年生
人数規模　15名程度
所要時間　2時間程度

Message

松葉谷戸冒険遊び場は、子供の「やってみたい！」が自然とあふれる環境を地域とともに育てています。うまくいくことだけでなく、失敗も挑戦の一歩として受け止め、自分らしく挑戦できる環境を大切にしています。子供の「やってみたい気持ち」と「やり方」を最大限尊重する、子供たちが主役の居場所です。

1. 荒地から子供の遊び場へ――地域に切りひらかれた活動の始まり

松葉谷戸公園にある冒険遊び場は、「常設型プレーパーク整備」に向けて地域の有志が集まり、急ピッチで立ち上げられた取組です。もともとは道路予定地として荒れた雑木林で、人が寄りつかない環境でしたが、竹藪の伐採や地面の整備を地域メンバー自らが行い、子供が安全に遊べる場へと生まれ変わらせてきました。こうした住民主体の活動を基盤に、任意団体である「松葉谷戸に冒険遊び場をつくる会」が継続的に運営しています。

2.“好きに遊べる”を大切にした場づくり――自由と安心を支える見守り

遊び場では、子供が自分で遊び方を選び、好きなペースで過ごせることを重視しています。スタッフは「遊ばせる人」ではなく、環境を整えて見守る立場で、怪我や喧嘩が起きても、まずは子供自身の意思や動きを尊重する関わりを大切にしています。受付も本名でなくてよく、必要な時だけ支援や連絡を行う柔軟な体制です。遊具や仕掛けを無理に提供するのではなく、「ここで何をするか」を子供が選べる環境が、安心と主体性の両立につながっています。

3. 多様な子供が交わる開かれた空間――地域とつながる居場所として

松葉谷戸には、小学生を中心に乳幼児から高学年まで幅広い子供が集まり、日常的に異年齢の交流が生まれています。障害のある子や不登校の子、地域の常連など、多様な背景をもつ子供が分け隔てなく遊ぶことが特徴で、外遊びを通じて自然に関係が広がっていきます。地域の住民が散歩の途中で立ち寄る姿も見られ、遊び場は地域に開かれた安全基地として認知が広がっています。こうした「混ざり合い」の環境が、子供にとっての多様な学びの機会を生み出しています。

4. 不登校の子にとっての利用しやすさ――学校時間に行ける“外の安心”

平日の午前中にも遊び場が開いていることは、学校へ向かうことが難しい子供にとって大きな安心につながっています。スタッフがフリースクール運営にも携わっているため、不登校への理解が深く、利用者が抵抗を感じにくい点も特徴です。関わる際は雑談中心で過干渉にならず、しかし必要なときには丁寧に対応する「ちょうどよい距離感」が保たれています。学校では得られない外の居場所として、子供が自分のペースで社会とつながる機会になっています。

5. 地域に広がるつながり――周知・アクセス・住民理解

松葉谷戸冒険遊び場は、利用する子供や家庭から高い支持を得ながら、少しずつ地域とのつながりを広げてきました。散歩の途中で立ち寄る住民の姿が見られる他、学校から散策授業の依頼が寄せられるなど、地域資源としての認知も徐々に進んでいます。一方で、場所が分かりにくいことや、情報発信が主にSNSに限られていることから、支援を必要とする家庭に十分に情報が届き渡らない場面もあります。また、運営に対する様々な意見が寄せられることもあり、活動の趣旨や安全面について丁寧に伝えていくことの重要性が改めて確認されています。今後は、住民・学校・関係機関との対話を重ねながら、理解と協力の輪を広げていくことで、地域により根ざした持続可能な居場所として発展していくことが期待されています。

協働・共創重視

みんなで作る！ 子ども村

（認定NPO法人 夢職人）

プログラムについて

「みんなで作る！ 子ども村

自然豊かな阿武隈山地にある東白川郡鮫川村で田舎の生活を体験する宿泊型プログラムです。みんなで力を合わせて農作業をしたり、斧で薪を割り、火を焚いて食事も作ります。

実施団体 認定NPO法人 夢職人
対　　象 小学3年生～中学3年生
人数規模 15名程度
所要時間 2泊3日

Message

当法人は、20年以上に渡って子供たちの多様な体験の機会を支えてきました。「子ども村」の活動では、親元を離れ、豊かな自然環境の中で、都市部ではできない体験や、年齢や地域が異なる子供たちの交流を楽しむことができます。子供たち一人ひとりに寄り添い、それぞれの主体性を尊重した活動を重視しています。

1.「非日常」を日常へとつなぐ体験プログラム

認定NPO法人夢職人の体験プログラムは、子供たちが生活や活動を自分の力で進めるプロセスを重視した「実体験型」の学びを提供しています。調理・片づけ・荷物の管理など、日常では大人が担いがちな行為も、自然の中で仲間と協力しながら行うことで主体的な経験へと変わります。そして「キャンプで皿洗いをしたから家でもやってみる」といったように、非日常で得た経験が家庭での行動に還元される点が特徴です。また、里山での農業体験や自然遊びは、普段触れられない環境で過ごすことで感覚が刺激され、次の挑戦への意欲にもつながっています。このように体験を“その場限り”にせず、子供の日常に戻っていく学びとして位置づけています。

2. 宿泊体験の魅力――“非日常”で生まれる小さな自立と積み重ね

プログラムの中でも、「みんなで作ろう！子ども村」のように自然の中で行う宿泊型キャンプは特に人気です。子供たちは、家庭や学校とは異なる「非日常」の環境で、仲間と協力しながら生活や活動を進めます。皿洗いや片づけ、荷物や時間の管理といった日常的な行為も、自分の力でやり遂げることで「できた」という実感につながり、その経験が家に戻った後の小さな変化として表れていると語られました。また、リピーターも多く、夏のキャンプでの体験がきっかけとなり、秋の別プログラムに自ら申し込む子もいます。こうした参加の継続が、自己肯定感や社会とつながる感覚を少しずつ育むプロセスとして重視されています。

3. 多様な子供を受け入れるための安全・健康管理――専門家の助言と統一した対応方針

このプログラムの運営においては、多様な子供を受け入れたいという思いが根底にあります。同時に、安全と健康を守るための事前準備を重視しており、申し込み時にアレルギーや既往症、配慮事項などを丁寧に確認し、出発前には保護者と電話で最終確認を行います。現地では、生活面とアクティビティ面の両方についてリスクを点検し、必要に応じて内容を変更します。こうした判断を支えるため、保育や学校教育などの現場経験を持つ専門職スタッフが内部研修を担当し、誰が担当しても同じ水準の対応ができるよう、方針の統一を図っています。台風接近時等には「無理をしない」を合言葉に、中止を含めた判断を迅速に行う体制も整えています。

4. 体験が「続いていく」価値――小さな成功が次の挑戦を生むプログラムの強み

このような運営体制で安心感をもたらすプログラムでは、参加する子供達にとって単発では終わらず、体験が次の行動につながっていく循環が生まれる場合があります。実際に、夏の宿泊体験で出会った仲間と次の季節のプログラムで再会したり、農業体験の「植える」「育てる」「収穫する」という過程に継続して参加する子供も多く見られます。また、子供たちが「また行きたい」と感じる背景には、自然の中で自分の役割を見つけ、達成感を得られる環境づくりがあります。夢職人は体験を「人が変わる場」として過大評価するのではなく、小さくても確かな成功体験を積み重ねることこそが、子供の次の一歩や自己肯定感を育むと捉えています。こうした“継続性のある学び”を提供できることが、プログラムの大きな強みとなっています。

コラム 不登校の状況にある児童・生徒に体験活動を届けるために

教育支援センターとの連携

教育支援センターは、学校との距離が生じた児童・生徒たちにとって、公的支援へつながる最初の接点となりうる重要な拠点です。体験活動を通じて安心できる場に巡り合うことが、これまで公的支援につながっていない児童・生徒にとって「初めての居場所」になるケースもあります。体験活動の提供を教育支援センターと連携して行う意義は大きく、「未来きらめきプロジェクト」でも実際に多くの参加者が教育支援センターからの案内をきっかけに事業を認知していました。さらに、体調や特性に適した対応や、退出・再入室の自由度、丁寧な声かけなどの個別配慮は、センターと実施団体の連携によって実現しやすく、児童・生徒の安全・安心を大きく支えています。それぞれの地域に応じた体験活動の実施を、教育支援センターが橋渡しすることで、児童・生徒にとって心理的負担の少ない参加導線が確保され、安心して挑戦できる環境が整っていきます。

周知・広報

「未来きらめきプロジェクト」では、ウェブサイトやSNSを活用した広告を実施し、多くの表示回数を獲得するなど一定の成果を上げましたが、参加者アンケートでプログラムを知った経緯を聞いたところ、ウェブサイトやSNSと答える割合はそれほど多くはないこともわかりました。その一方で、インタビューからは、学校の担任教諭や、教育支援センタースタッフ、他の保護者など、「身近で信頼できる大人」による案内が、保護者や児童・生徒にとっての安心材料となり、申込みの後押しにつながっていたことが明らかになっています。

不登校の状況にある児童・生徒は特に情報接触機会が限られる上、たとえ情報を得ても、外出や対人コミュニケーションへの不安、心身の状態などがハードルとなり、参加に結び付かないことが少なくありません。そのため、児童・生徒の心身の状態や家庭環境に応じた、段階的で丁寧なアプローチが不可欠です。

児童・生徒が安心して参加につながる機会を広げ、不登校の状況にある児童・生徒が体験活動に参加する機会を充実させるためるためには、学校・教育支援センター・スクールソーシャルワーカー（SSW）・フリースクールなど、多様なネットワークを重層的に活用した周知を行うことが重要となります。

第3章 児童・生徒及び保護者からの声

調査方法

「未来きらめきプロジェクト」の体験活動プログラム参加者（児童・生徒および保護者）に対してインタビューを行いました。安心で丁寧な聞き取りを行うため、本調査研究委員会の委員にインタビュアーを依頼しました。

調査協力者

令和５年度から令和６年度の間に「未来きらめきプロジェクト」の体験活動プログラムに参加した方のうち、インタビューへの協力に同意いただいた児童・生徒及びその保護者計19組。

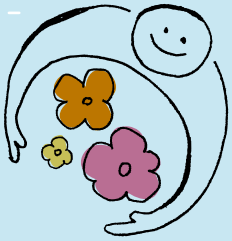
分析方法

この調査では、児童・生徒と保護者の回答が集中していた項目を中心に語りの特徴を抽出しました。そこでの主な特徴を一目でわかるようにし、児童・生徒や保護者が置かれていた状況、活動に参加するまでのプロセスやその後の感想、そして活動へのニーズについて分析しました。

本章の流れ

本章では、以下の４つの質問に基づいて、児童・生徒や保護者の声を紹介します。

Q1　参加した子供・保護者は、どのようなニーズを感じていたの？
Q2　どうやって活動を知り、申し込むことにしたの？
Q3　参加してみてどうだった？
Q4　今後、求められる工夫は何？



本章の見方

質問項目・ここで明らかにする疑問

疑問に対する答え

語りのアイコンは、属性を特定しないランダムなイラストで表現しています。

児童・生徒、保護者の語り

語りの特徴

語りを踏まえた委員による解説

Q.1 参加した子供・保護者は、どのようなニーズを感じていたの？

学び・経験の場へのアクセス

小学校が彼の居場所にならなくて、他のフリースクールで居場所をつくろうとしています。彼の知的好奇心を満たしてやれる場所をどうにかつくってあげたいって、本当に毎日毎日探しているので。（知的好奇心が満たされる場を見つけたい）

調査委員会による解説

以上の語りからは、子供の「知的好奇心が満たされる場」や、「学校にいるお友だちと」「一緒に何かできる」機会を、保護者の方が必要としていることがわかります。こうした、子供の成長を支える「学び・経験」を育む場にアクセスしづらいという、保護者の悩みが明らかになりました。

Q.1 参加した子供・保護者は、どのようなニーズを感じていたの？

学び・経験の場へのアクセス

小学校が彼の居場所にならなくて、他のフリースクールで居場所をつくろうとしています。彼の知的好奇心を満たしてやれる場所をどうにかつくってあげたいって、本当に毎日毎日探しているので。（知的好奇心が満たされる場を見つけたい）

学校にいる友だちとも、一緒に何かできることが理想だけど、不登校だからっていう理由で区別されちゃう。学校に決められた形では行きづらいけれども、お友だちが嫌なわけではないんです。（学校の友だちと一緒に何かできる機会がほしい）

調査委員会による解説

以上の語りからは、子供の「知的好奇心が満たされる場」や、「学校にいるお友だちと」「一緒に何かできる」機会を、保護者の方が必要としていることがわかります。こうした、子供の成長を支える「学び・経験」を育む場にアクセスしづらいという、保護者の悩みが明らかになりました。

Q.1 参加した子供・保護者は、どのようなニーズを感じていたの？

「家」にはない体験

知識自体はインターネットも本もあるので、自分で気になれば調べるんですけど。家の中ではできないような体験をやらせたいですね。自然体験だったり、動物も好きなので、動物と触れ合ったりとか。**（知識は調べられるけど）**

自然系のほうが家で提供できない体験なので、同世代の子とかちょっと上のお友だちがいるところがいいかなっていうふうには思っていて。面倒みるっていうより面倒みてもらうほうが、合っているのかなと思うので。**（交流の中での自然体験を）**

調査委員会による解説

保護者の方からは、家の中ではできない体験を求める声がありました。特に、自然体験や動物とのふれあう機会を求めていることや、そうした経験を、年齢の近い子供との交流の中で味わってほしいと、保護者の方は考えていました。知識は家の中で調べられるからこそ、他者との関わりの中で、見て触れて学ぶことを願う、保護者の希望が明らかになりました。

Q.1 参加した子供・保護者は、どのようなニーズを感じていたの？

身体を動かす機会

身体を動かす機会がなかなか取れなくって、家にいちゃうと。スポーツチームとは違って、行っても行かなくてもいいぐらいの軽い気持ちでできることがあればいいのかなと思っています。**（気軽な場が欲しい）**

野球チームみたいなところは、まだ難しいかなと思っていて。集団で朝からずっと練習してとか、チームの勝ち負けがとか、そういうプレッシャーはまだ負担かなと思います。楽しめる野球みたいなのがいいなとは思うんですけど。**（集団活動による負担）**

調査委員会による解説

保護者の方からは、家にいる時間が長くなり子供の体力が心配であっても、参加/不参加を自由に決められる運動の場が限られていることや、チームスポーツに興味があっても、集団での練習を前提としていること、競技で勝つことを求められるのではないかという懸念から、「楽しめる」場が限られているといった声が聞かれました。運動を提供する機会が社会の様々な場に設けられている一方で、そうした活動に付随する性質と、子供の生活状況との間でバランスを取ろうとすると、結果的に運動の機会が制限される難しさが明らかになりました。

Q.1 参加した子供・保護者は、どのようなニーズを感じていたの？

開催時期と子供のタイミング

今、いろんな人を知りたい時期で、外に目が向いているから、活動に参加しやすかったのかもしれないですね。多分、もっと前の段階で声をかけても「そんな遠くには行かない」って言っていたと思うんです。**（今、外に目が向いている）**

子供が不登校になってすぐには、色んな活動を探してみようとはなりませんでしたが、学校に行かなくなって1年以上経つと、学校にはそう簡単には行けないだろうなと思いはじめました。そうなると、なにか子供の得意なものを伸ばせるところを探していきたいなと考えるようになりました。**（得意なことを伸ばしたい）**

夏休み合宿の企画で、当日に辞退しますということもあり、できるところからゆっくりゆっくり、という風にしていました。本人の前向きな気持ちや、楽しみを見つけられるようになってきたというのもあり、今回活動に参加できたのかなと思っています。**（前向きな気持ちや楽しむ気持ちの発露）**

調査委員会による解説

以上の語りからは、子供の中での前向きな気持ちが膨らむ時期や、「外」に目が向く時期と、本事業の開催時期とがマッチすることで、プログラムへの参加に至ったことがわかります。子供の成長の仕方は多様であり、参加に至るまでに様々な時期を経ているという前提を踏まえて、子供が安心して過ごせる環境を整え、活動の内容を工夫していくことが重要です。

Q2. どうやって活動を知り、申し込むことにしたの？

保護者が事業を認知するプロセス

家から近い場所で、平日に何か参加できる活動があればいいなと思って探していたところ、不登校の子供をもつ保護者のグループチャットに情報を流してくれた方がいました。そこでもらった情報で、今回の活動の存在を知って応募しました。**（SNS経由）**

学校からチラシをもらったので、「こんなのあるよ」って子供に見せたところ、「面白そう。やりたい」というので応募することになりました。**（学校経由）**

通っているフリースクールの机の上に、パンフレットとチラシが置いてあって、何かなと思って手にとって持ち帰ったのが応募のきっかけですね。**（フリースクール経由）**

調査委員会による解説

今回の事業は、主に保護者が情報を得ることによって認知されていました。学校の担任や管理職からの紹介、フリースクールを通じて事業を知った保護者もみられましたが、多くの場合、インターネット検索や、不登校の子供をもつ保護者同士のつながりのなかで情報が共有されていました。とりわけ、対面でのやり取りに限らず、SNS上のグループチャット等を通じたオンラインでのコミュニケーションが、事業の認知に結びついていた点が特徴として挙げられます。

Q2. どうやって活動を知り、申し込むことにしたの？

活動に対する信頼性

東京都のフリースクールの助成金関連のアンケートのお知らせと一緒に、今回の活動についての案内が入っていて、「いろんなものがあるな」と思って申し込みました。**（東京都の不登校関連事業からの連絡）**

自分で探したものだと、「いきなり行って大丈夫かな？」という不安があるのですが、学校とか行政から案内があった活動だと安心して参加できますね。**（学校・行政などの公的機関から『認知されている活動』としての安心感）**

調査委員会による解説

今回の事業については、保護者が東京都の不登校関連事業などを通じて、その活動内容を知るケースがみられました。学校を含むこうした公的機関から、学校外の学びや居場所に関する活動の案内がなされることは、保護者にとって活動への信頼感を高める要因となり、安心して申し込みを行うきっかけになっていたと考えられます。

Q2. どうやって活動を知り、申し込むことにしたの？

子供が捉えた参加の経緯

お母さんから誘われて、自然があっていいなーと思って。いっぱいお友だちも来るみたいだから行こうと思った。**（身近な人からの誘い）**

プログラムを知ったのは、先生がこういうのあるよって教えてくれたから。それで活動の内容を見て、すごい、いいじゃんって思って、参加を決めた。**（身近な人からの誘い）**

お姉ちゃんから直接誘われたわけじゃないけど、お姉ちゃんがやってるとこを見に行って、それ見て、面白そうだなと思って参加しようと思った。**（きょうだいを通して関心をもつ）**

調査委員会による解説

子供たちがプログラムの存在を知る契機としては、自分たちでプログラムに関する情報収集をするという方法よりも、自分と関わりのある人が情報を伝達することが主な方法となっていました。多くの子供はプログラムを紹介した人として保護者を挙げていましたが、その他にも教員やきょうだいなど身近な人たちを挙げていました。他者からの働きかけがきっかけではあるものの、プログラムへの参加に至るまでには、子供が活動内容に対して一定の関心を見せたり、参加を承諾することが重要なプロセスとしてありました。

Q2. どうやって活動を知り、申し込むことにしたの？

子供自身による決定の重視

モノとか作ったりするのが好きなので、「こういうのあるみたいだよ」って言ったら、本人が「やりたい」って言ったので。家でも、材料を引っ張り出しては作ってみたいなことを常にやっているんです。**（普段の「好き」×本人による「やりたい」）**

基本的に彼の自由意思に、全部参加するかどうかも、当日行ってみて雰囲気がいやだったら帰っていいよとか、任せているんですけど、終わった後もすごい楽しそうに、「また来る」ってその場で宣言していました。**（自由意思に任せている）**

調査委員会による解説

活動に参加するにあたり、申し込みの段階では、子供の興味を踏まえて参加するプログラムを提案しつつ、本人の「やりたい」という気持ちを大切にしたという声や、活動日当日の動きについても、子供の意思に「任せている」という保護者の声が聞かれました。こうした、普段の子供の様子を踏まえつつ子供自身による決定に寄り添うことが、活動の楽しさに結びついていくと考えられます。

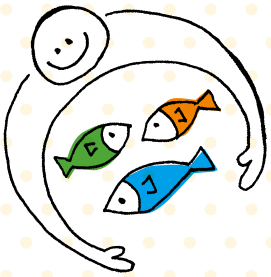
Q2. どうやって活動を知り、申し込むことにしたの？

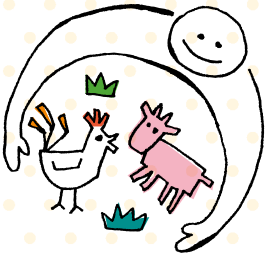
当日の雰囲気がわからないことへの不安

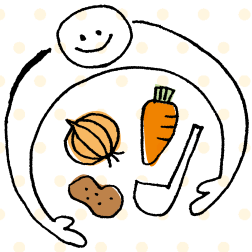
どういう人が来ているのか分からなくて、いきなり親子だけで行って大丈夫なのかなとか、居場所がなかったらどうしようというのは、不安としてあるかもしれないですね。**（居場所がなかったらどうしよう）**

調査委員会による解説

保護者の方からは、プログラムへの申し込みから当日参加するまでの不安についての声がありました。例えば、他の参加者とのつながりがないなかで当日を迎えるにあたり、「居場所がなかったらどうしよう」と不安を抱えていたと話す保護者もいました。誰もが参加しやすい活動にするために、当日の雰囲気や過ごし方について丁寧に情報を示すことが求められます。







Q3. 参加してみてどうだった？

非日常な経験の新鮮さ

自然の中で遊んだり、学校とかおうちでは全然できないようなことがたくさんあって、すごい楽しかった。**（普段の生活ではできない体験）**

視覚障害のある人の世界って、最初どんな感じなのかなって思ってたんですけど、やってみるとすごく楽しくて。怖かったのは最初だけ。暗闇なので他の人と話しやすかったです。**（暗闇の世界を知る）**

楽しかったのは、外で竹を使って遊んだり、柚子をとったりしたこと。あんまりやったことないことができたからよかった。**（野外活動）**

調査委員会による解説

多くの子供が、自分たちの参加したプログラムについて肯定的に捉え、次回以降の参加意思を示していました。印象的なことの1つ目として、プログラムが「非日常的な経験」であったと語っていました。非日常的な経験とは、学校や家ではできないことを指し、具体的には、調理活動、自然体験や没入感のある空間を経験することが含まれています。子供にとっては生まれて初めての体験や、普段の生活では経験できないことに挑戦する機会があることが、活動に対する意欲を支えるきっかけになることが分かりました。

Q3. 参加してみてどうだった？

普段出会わない人たちとの交流

みんなで最後に公園に行ったときにそこで遊んだ女の子と友だちになった。それにみんなとブランコしたり、立ち乗りとか、2人乗りとかできたから思い出がいっぱいできた。**（友だちができる）**

キャンプで、人との関わり方とか薪の割り方を知ったり、料理を食べて、この人の料理はこんな味なんだなと思ったりとか、そういう感じで経験を積めた。ちょっと眠れなかったこともあったけど、とにかく楽しかった。**（多様な他者を知る）**

運営スタッフが積極的に話しかけてくれたのが良かった。気配りとかもしっかりしてくれてるし、話しかけてくる話題がよかった。**（スタッフとの交流）**

調査委員会による解説

2つ目の印象的なこととして子供たちは、普段出会わない人たちとの交流を挙げていました。具体的に、参加者である他の子供やスタッフを挙げていました。多くの対象者はプログラムの中で他の子供と初めて知り合っていたものの、一緒に料理を作るなど、特定の活動を協働して進める中で、互いに交流を深めていました。またスタッフに対しては参加者に対する気遣いや丁寧な対応のおかげで、活動に対して前向きに参加することができたと語っていました。

Q3. 参加してみてどうだった？

創意工夫できる楽しさ

プログラムで、次、どういうことしようかなみたいに考えるのが楽しかった。**（活動の選択）**

調理で、餃子の皮の上にマシュマロをのせて、チョコレートソースをかけて、デザートみたいにしたりした。あとは、チーズとマヨネーズとケチャップ入れて、ザ・ピザみたいなのにして、自分でアレンジできるのが楽しかった。**（活動の工夫）**

すごい良い写真が撮れたのが楽しかった。可愛いカモ2羽が陸に上がってたから、自分は落ち葉のところに行って撮ったの。自分で撮る場所を考えて撮れたのが良かった。**（活動の工夫）**

調査委員会による解説

3つ目の印象的なこととして、子供たちは創意工夫できる楽しさについて触れていました。子供の多くは、自分で活動そのものを選択できたことや、一つの活動の中でも自分が工夫して活動に関わることができたのが印象的だと語っていました。そのため、既定の枠組みがある活動よりも、子供が創意工夫できる環境が一程度整っていることが子供の参加意欲につながることが示されました。

Q3. 参加してみてどうだった？

スタッフとのコミュニケーションが果たす役割

初めての場所とか苦手で、皮細工とかやりながら、気持ちを静めたっていう感じです。褒めてもらったり、すごいね、上手だねとかっていう、褒める言葉を聞いて、だんだん落ち着いていったのかなって。**（大人とのかかわりによる安心）**

YouTubeとかで知識が広がっているけど、全部信じちゃったりとかするので、信頼できる人から、活動を通してお世話になったりして、様々なことを経験してもらいたいというのがすごくあります。**（信頼できる大人との経験）**

調査委員会による解説

保護者からは、大人からの声掛けによって、子供の不安な気持ちが和らいだという声や、活動を通して信頼できる大人に「お世話になる」こと自体が、子供にとって重要な経験であるという声が聞かれました。スタッフの子供への寄り添いは、活動に十全に参加するための橋渡しの役割を担うのと同時に、こうした交流そのものが子供の成長にとって重要であることが明らかになりました。

Q3. 参加してみてどうだった？

保護者が感じた子供の変化

今回の活動に参加してからは、子供がより海外に興味をもったり、自分から言葉でしゃべることができるようになったりしていて、コミュニケーションを取れるようになりたいという思いが強まっている印象があります。**（自分の新しい可能性に挑戦するきっかけ）**

外出したくない時期がつづいていたときに、今回の活動なら興味がありそうだったのでなんとか子供を連れ出しました。タイミングが合ったのか、活動への参加をきっかけとして、少しずつ外出が増えたなと思います。楽しかった成功体験が少しずつ積まれていった感じですかね。**（「できること」「やってみたいこと」の選択肢の増加）**

宿泊を伴う活動に参加しましたが、すごく楽しんでいました。家ではない場所で過ごして色んな体験をしたからか、迎えに行った時にはなんだか大人びた顔になっていましたね。**（体験活動を通じた成長の実感）**

帰ってきたときはやっぱりヘトヘトにはなっていたのですが、すごく表情が爽やかで、充実した様子でした。久しぶりに子供の柔らかい表情を見た気がします。**（自信や達成感によるポジティブな気持ちの芽生え）**

久しぶりにチームプレイで身体を動かして、「自分ってこういうこともできるんだ」という刺激を受けて帰ってきた感じでした。子供に学校に行くように言っていた時期だったのですが、そのあたりから、「まあいいか」と思うようになりましたね。昔の出来事を思い出して「あんなことあったね」など、子供といろんな話もできました。**（子供への認識を更新するプロセス）**

調査委員会による解説

今回の事業への参加を通じて、保護者は子供たちの変化をさまざまな側面から感じていました。活動の中で取り組んだ遊びや体験を通して、子供たちは自分自身の興味・関心や、できること、やってみたいことの幅を広げていったと考えられます。こうした活動に継続して参加できたことが、子供たちの自己への自信や達成感につながっていたこともうかがえます。さらに、そのような子供たちの変化を目にするなかで、保護者自身の我が子に向けるまなざしにも変化が生じていた様子がみられました。

Q4. 今後、求められる工夫は何？

多様な活動内容の展開

うちの子は、トランポリンとか、身体を動かすことが結構好きなので。活動の一つとして、そういう身体を動かして楽しめるようなものがあれば、より参加しやすいかもしれません。**（身体を動かす活動の取り入れ）**

家ではついついゲームとか画面を見ることが多くなってしまうので、自然のなかで身体を動かしたりする機会をたくさんもつことができたら嬉しいです。**（自然体験の取り入れ）**

調査委員会による解説

子供が不登校となり自宅で過ごす時間が増えると、PCやゲームなどをして過ごす時間が長くなる傾向があることが挙げられました。こうした状況を踏まえ、日常的に身体を動かして体力をつけることや、川や山、動物などを含む自然と触れ合う機会をもつことなど、多様な活動内容の展開に向けた要望がありました。

Q4. 今後、求められる工夫は何？

活動様式への配慮

学校に行っていないので、なにかイベントがあっても申し込み締め切りが過ぎてから、お便りや情報がくることが結構あります。なので、申し込める活動に出会うのがなかなか難しいですね。**（活動の参加期限）**

活動に参加するとき、移動に長い時間がかかったので、もう少し近い場所でも開催されていると参加しやすいです。**（活動の開催場所の多様化）**

もうちょっと長かったほうがみんなでいられる時間も楽しいから、もうちょっとみんなで一緒にいたかった。**（活動時間の延長）**

ハゼ釣りをやったけど、友だちとかスタッフからアドバイスをもらって、コツをやっとつかんだところで終わりの時間がきちゃったから、もうちょっと時間を延長してほしい。**（活動時間の延長）**

高学年向けのイベントに申し込みたいけれど、対象年齢ではないから申し込めないことがあったので、保護者同伴であれば参加できるなど、選択肢を広げてもらえると嬉しいなと思います。**（対象年齢の拡大）**

プログラム自体は楽しかったけど、対象が小学生か中学生ってなってたから、高校生も行けると嬉しい。**（対象年齢の拡大）**

調査委員会による解説

保護者の視点からは、学校等から情報を得る機会が少ないため、子供たちが参加可能な活動を見つけても、申込期限が過ぎている場合が多いことが挙げられました。また、開催場所については、都内の東西南北のさまざまな地域で活動が実施されることで参加しやすくなることや、現在設定されている対象年齢の制限を一定程度緩和することで、より柔軟な参加が可能になるのではないかという意見が共有されました。

子供の視点からは、子供のほとんどが、プログラムを通して初めて知り合ったため、一緒に遊べる時間が不十分だと感じた人がいました。また、活動に没入できるようになったところで終了時間が来てしまったため、時間の延長を希望していた子供もいました。このように他者との交流や活動への十全な参加においては一人ひとりのペースがあるため、十分な活動時間の確保を希望していました。また、プログラムによっては参加対象者の年齢が限定されていたため、対象外の子供が参加するためには、事前に運営団体側に確認をとる必要があり、そのような手続きが参加に向かう気持ちを妨げる可能性があると語っていた人もいました。

Q4. 今後、求められる工夫は何？

個々の子供への寄り添い

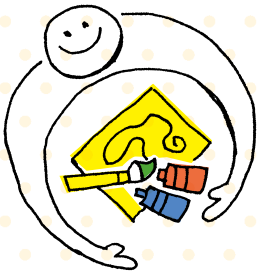
活動内容にバリエーションがあるといいなと思います。内容が一つの場合、もしそれが合わないとなったときには行けなくなってしまうので、例えば、運動の場合でも何種目かの中から自分で選べるようになっていると参加しやすいですね。**（ゆるやかで広い活動内容）**

「これをしなければいけない」となるとプレッシャーがかかってしまうので、「何をしてもいい」という活動の方針は、子供にとっても合っていたなと思います。**（自由な活動の保障）**

テーマがある程度広く設定されているなかで、開始時間が特段決められておらず、好きなときに行ける活動が近くにあるとよいですね。**（ゆるやかで広い活動時間）**

調査委員会による解説

子供たちの体調が安定せず外出できない場合もあることから、対面のみでなくオンライン形式でも参加できる仕組みがあると、申し込みがしやすいことが挙げられました。また、実施する活動内容が一つに限られず、子供たちのその時々の体調や興味・関心に応じて、各自が取り組みたい活動を選択できるような、ゆるやかな内容や時間設定がなされていることも、参加のしやすさにつながることが分かりました。



Q4. 今後、求められる工夫は何？

つながりの確保

活動に参加したときに周りが知らない子だけだと、ぽつんとしてしまうこともあるので、そこについては、どのように対応していけばよいかなと思いました。**（子供同士の関係性を紡ぐ支援）**

今回の活動は子供にとっての居場所になったのでとてもよかったです。年度ごとで終わってしまうので、毎月でなくてもよいのですが、継続的な居場所があるといいなと思います。**（「居場所」としての継続性）**

宿泊プログラムには参加したいけど、保護者が一緒じゃないと大丈夫かな、というか心配です。**（家族の同伴希望）**

このプログラムを知ったとき、初めて行くときは弟と行きたいなって思った。**（家族の同伴希望）**

子供が活動に参加しているときに、たまたま会った他の保護者の方とお話したのですが、不登校の子供をもつ親同士で話ができてよかったです。**（保護者同士のつながり）**

調査委員会による解説

今回の事業には単発で参加する子供もおり、周囲に知り合いがいないことに不安感を覚えることがありました。そのため、子供同士の関係性をつなげる支援を行うことに加えて、単発の居場所にとどまらず、継続して参加でき、安心できる居場所をつくっていくことが求められることが分かりました。ここでは、子供が保護者や家族と一緒に活動に参加できる仕組みがあると、より安心感を得ることができる場合があることも挙げられました。また、子供が不登校の状況にあると、情報に触れる機会が限られ、他の保護者とのつながりをつくることが難しいことも共有されました。こうした保護者同士の横のつながりについては、活動に参加するなかで形成されることもあるため、今回のような活動が、子供同士のつながりを紡ぐだけでなく、保護者同士のゆるやかなつながりを形成する機能をもつことが望まれます。

本章では、本活動に実際に参加した子供およびその保護者へのインタビューをもとに、活動への参加の前提条件、申し込みに至るまでのプロセス、活動に参加して感じたこと、並びに活動に対するニーズを明らかにしました。分析の結果、子供たちは不登校であることに起因して、学びや体験の場へのアクセスのしづらさを抱えていましたが、学校や行政、保護者同士による情報共有を通じて本活動に参加することになりました。参加にあたっては、普段家ではできない体験や、身体を動かす活動への期待が寄せられており、子供同士やスタッフとの関わりを通じて、子供自身はもちろんのこと、保護者も子供たちの成長としての変化を実感していました。今後に向けては、活動の対象年齢の拡大に加え、多様なニーズをもつ子供が参加しやすくなるよう、活動内容・時間を柔軟に設定するなど、子供たちがより安心できる環境で、興味・関心をもって探究を進められるような、より魅力ある体験活動を運営することが望まれます。

【本章の執筆者】
令和７年度不登校児童・生徒等の学校外体験活動に関する調査研究委員会研究補助委員
中野　綾香　〔上智大学　日本学術振興会特別研究員（PD）〕
鈴木　菖　〔上智大学大学院　総合人間科学研究科〕
別府　崇善　〔東京大学大学院　教育学研究科〕

第4章 事業の成果と今後の方向性

「未来きらめきプロジェクト」では、不登校の児童・生徒が安心して参加できる体験活動を提供し、自らの興味・関心を再発見し、多様な体験を積み重ねられる機会を創出してきました。こうした活動は、新しい挑戦に踏み出すきっかけとなるだけでなく、保護者にとっても信頼できる大人や地域との接点を得る機会となり、家庭における不安の軽減にもつながっています。これらの成果は、地域全体で児童・生徒を支える環境づくりの重要性を改めて示しています。

1. 事業を通じて見えてきたこと

「未来きらめきプロジェクト」を通じて、不登校の児童・生徒が安心して参加できる環境を整えることが、自己肯定感の回復や他者との自然なつながりの再生に大きく寄与することが明らかになりました。児童・生徒が自分のペースで関われる柔軟な場を用意することは、参加への心理的負担を軽減し、活動に向かう意欲を高めるために欠かせないものでした。また、保護者が安心して見守れる関係性を構築することも重要であり、プログラムへの信頼が参加につながる大きな要素となっていました。さらに、専門性や独自のアイデアをもつ団体との協働が、児童・生徒の興味・関心を引き出し、地域に存在する多様な教育資源を効果的に活用できることも確認されました。

一方で、不登校児童・生徒への情報が十分に行き届いていない現状があり、とりわけ高校生世代では参加者が少ない傾向が見られました。また、活動に参加する前に「自分には合わないかもしれない」という不安を抱える児童・生徒も多く、初回の一歩を踏み出すための動機づけや安心感の醸成も必要です。さらに、参加が1回限りで終わってしまう場合もあり、継続的な関わりを生むための仕組みづくりが十分とは言えない状況も明らかになりました。

2. 今後のさらなる充実に向けて

今後、不登校児童・生徒に体験活動の機会をより確実に届けていくためには、自治体と多様なプログラムを有する団体が連携し、地域内で継続的に体験活動が提供される体制を整えることが重要です。特に、情報が届きにくい児童・生徒や参加が少ない高校生への周知を強化し、活動内容が伝わる工夫を進めることが求められます。

また、地域がもつ教育資源を把握し、それぞれの団体と協働することで、児童・生徒の興味・関心や心身の状況に応じた選択肢を増やし、参加のハードルを下げることが期待されます。

さらに教育支援センターを体験活動との接点として位置づけ、活動への参加から相談支援へと自然に結びつけていく体制を構築することで、児童・生徒や保護者の不安を軽減し、継続的な参加にもつながりやすくなります。多様な主体が創意工夫をもち寄り、地域の資源を生かしながら体験活動を発展させていくことが、今後の課題解決に向けて欠かせない視点となります。

3. まとめ

不登校の児童・生徒や保護者は、多様な体験活動を求めています。自治体や民間団体がそれぞれ個別に取り組むのではなく、互いが連携しあいながら、多様な背景をもつ児童・生徒を受け入れられる環境を整えていくことが求められています。多彩な体験活動の機会を継続して提供することで、児童・生徒の健やかな学びと成長を地域全体で支えることが期待されます。

巻末資料

○令和７年度不登校児童・生徒等の学校外体験活動に関する調査研究委員会　委員一覧

分類	氏名	所　属　等
調査研究委員	保 坂　　亨	千葉大学　名誉教授
	酒 井　　朗	上智大学　総合人間科学部教育学科　教授
	木 村　　文 香	共栄大学　教育学部　教育学科　准教授
	入 江　　優 子	東京学芸大学　教育インキュベーション推進機構 こどもの学び困難支援センター　准教授
	土 岐　　玲 奈	星槎大学大学院　教育学研究科　准教授
研究補助委員	中 野　　綾 香	上智大学　日本学術振興会特別研究員（PD）
	鈴 木　　菖	上智大学大学院　総合人間科学研究科
	別 府　　崇 善	東京大学大学院　教育学研究科

本事業の運営にあたり、調査研究委員会の皆様には貴重な御意見と御協力を賜りました。
ここに厚く感謝申し上げます。

○参考・引用

・文部科学省「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」
（令和元年10月25日付元文科初第698号）
・「令和６年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」について
（令和７年10月東京都教育委員会）

未来きらめきプロジェクト

東京都 教育庁 地域教育支援部 生涯学習課
〒163-8001 東京都新宿区西新宿2-8-1
TEL 03-5320-6874